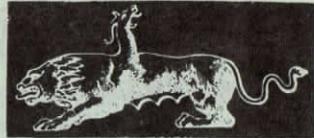


らじかる



第3号

エマ・ゴールドマン・アンソロジー 「女性解放の悲劇」価格決定

価格未定にもかかわらず、多数の直接購読の申し込み、有難うございました。最初の予定では250頁程の本と想定していたのですが、結局300頁近くになり、価格も750円となったこととお知らせいたします。ただ、まえにもお知らせしていましたように、直接購読申し込みの皆様には、送料共で定価の2割引でお送りしますのでご了承下さい。

日常性の点検 東郷一三

おそらく社会変革と自己変革は相互に補完的な関係にある。資本主義社会に生きるものにとって資本主義社会を変革することは彼につきまわっている資本主義的発想、思考、行動を変革することである。どのような社会体制に生きるものにも同じことが言える。社会と自己の両者の変革を担う第一の方法は各自の日常性の点検であり、それにつづくのは日常性の復権である。これこそが唯一の変革手段ではないにしても、最も本質的な性格を帯びた変革手段と思われる。

日常性を乗り越えよ、日常性を克服せよ、と言われることがある。乗り越えられ、克服される日常性が盲目的な何の志向もない日常性であるならば、それだけで正しいのであるが、乗り越えと克服の仕方の過程、そしてその後の新しい日常性の内容が問われねばなら

ない。人間と社会は何らかの日常性を営まないかぎり、生存や存続は不可能であり、たとえ自己の意志が全く自己の生活に反映していない生活であったとしても、それはそれで一つの日常性である。

一個の人間の日常性とは個人的＝時間的と同時に社会的＝空間的に動的にとらえられるべきであって、静止した状態にとらえられるべきではない。もとより、分析のための便法としては理念的に静的にとらえるのはさしつかえない。

人間は社会的な動物であるという命題には、解釈の多様性を認めておこなら、疑義はない。日常性の点検とは自己が社会においていかなる役割を果しているか、ということの分析と同義である。とりわけ自己の生産労働ないしは自己の労働による生産物が社会にどのような作用を及ぼしているか、社会においてどのような位置を占めているか、ということをきびしく認識することである。たとえいかにささやかな労働であり生産物であろうとも、抽象することによって、一般的には確固たる分析が可能である。この点検作業によって、自己の労働や生産物が一個の人間の日常性を支えるものであろうとも、社会にとり有害無益である場合もあることを発見できるであろう。あるいはまた、自己の日常性が社会の変革すべき方向と抵触している場合もあることに気づくであろう。(労働は社会的な有用性や効用のみから把握しきれものではないが、ここでは功利的に把握しておこう。)

日常性の点検によって、その日常性が否定すべきものであること、ないしは少なくとも肯定しがたいものであることが判明したとき、そのときこそ彼の思想性が問われているのである。否定すべき対象の強靱さの前にたじろ

ぐか、敢然としてその対象と全人格的に対決するか、詭弁を弄して自己と社会をあざむくか、そのときの選択眼はまさに多様である。最も困難なのは否定すべき日常性との対決の仕方であり、否定された日常性以後の新しい日常性の内実であるが、それもまた前述した労働と生産物の規準に従ってきびしく検討されねばならない。

このように絶え間なく自己の日常性を点検し、よりすぐれた日常性を確立していく行為、この行為もまた一つの日常性であるが、この日常性こそが最も根源的な革命的なものである。ここにいたって、日常性は唾棄すべき語彙から脱け出て復権される。

社会主義、アナキズム、革命等々を口にするとき、私たちはあまりにも自己の日常性からかけ離れたことを語っていたように思う。アナキズムや革命が商品化されてはいないか。美しく飾られた「商品アナキズム」や「商品革命」がどれほど多量に販売されようとも、支配者はいささかの痛痒も感じないであろう。販売者と購買者のいずれとも緊張関係のない「商品アナキズム」はしょせん有閑階級の知的アクセサリにすぎない。

エマとウーマン・リブ (1)

はしもと・よしはる

文明は女性を圧迫する。文明が攻撃するのは女性である。今日彼女達の生存はどうであろうか？ 困憊と苦勞の中に生き、男達は裁縫や秘書のこまごました仕事まで侵し、女達が農作業の骨折仕事に就くのが認められている。30代の健康な男が

事務机を前にしてかがみこみ、また事務や家庭のつまらぬ瑣事の息抜きで、妻子がいない者のように、毛むくじゃらの手でコーヒを飲むなどを見るのは、体裁の悪いことではないだろうか。

—四運動の理論：

シャルル・フォーリエー

現在、わが国のウーマン・リブの当面の課題は妊娠中絶の権利、ピルの使用を認めよ…というにあるようだ。これは子供を産む産まないの自由は女性にあるとするこの運動の一つの柱だと思われる。新聞でみる限り中絶が認められなくなるのは、経済的理由によるものの項を除く様子である。国とはいつでも優生法を振りかざして、健康で明かるい子供、成績優良の子孫を残す義務があると居なおるのが好きである。

ウーマン・リブに就いての一つの偏見は、そこに参加している女性は権利意識が強く、扱いにくい、理屈ばかりで女らしさが少ないというのである。更に女が女であることを振りかざしてみても男だって精一杯生きていたのだから特に女をもちださなくてもいいだろう。所詮男といい女といっても人間なんだから、重要なのは人間としてどうかということだ。また、フリードリッヒ・エンゲルス殿も言うように、「女性解放は女性の手で！」である。まず社会条件、経済条件を改善したならば、そこには自づから新しい女性の生存が認められるに違いないのだ etc

エマが「女性解放の悲劇」を書いた1906年頃も問題は同じであった。その時代は婦人参政権と自由恋愛、それに産児制限がテーマだった。しかしエマは言う。女性が経済的社会的平等を獲得した現在、果して彼女は幸福でしょうか。今日、女性はあらゆる職業の場に進出して、(むろん同一職種につき、男性と同一の賃金を得ていないにしても) 職業を得る機会の平等を獲得しました。それで幸福といえるでしょうか。何か欠けているのだ。エマはその欠けたものは、女が母性になる権利

だと言うのである。「女性はこの教訓、彼女の自由は、自分の力でその自由を達成するだけ実現するのだということを学ぶ必要があります。ですから女性にとっては、自分の内部の更生一偏見、伝統、習慣の重みを切り離すことから始めるのが一層重要です。………平等の権利を要求するのは正しく立派です。けれど最も重要な権利は、愛し愛される権利です。」(本文81頁より)とある。

これは一見精神訓話的で、それだけでは女性はいくらか解放されたことにならない。眼に見えるものだけが真実だとする向きには不満かも知れない。しかしアナキストとしてのエマは、例え革命において、社会条件経済条件だけを変革しても、それを成立させている理念が手つかずのまま、放置されるなら、その革命は失敗するだろうと信じているのである。その限り彼女の論旨は明瞭で連続して居る。つまり革命といってもそれは歴史にみてるなら、理念を実際に応用したものである。もしそうなら、その理念は倫理的でなければならぬ。またここでの倫理は個人的道徳をさすだけでなく、社会の一勢力としての人間の在り方、身の処し方をさすのである。これを不問にした革命は、人間の人間による殺戮でしかないのだ。しかしここでは、ウーマン・リブの視点とエマの視点の交差する所を探ってみよう。(この項つづく)

過渡期論批判 1

西塔昌弘

現在、一群のアナキストの間では、アナキズムにおいて過渡期なるものが成立するということが自明のこととして、取り扱われている。しかし、それがアナキズムの思想性と十分に照し合わされて主張されているのかといえば、疑問とせざるをえない。はたして、過渡期なるものは、アナキズムの原理と矛盾しないのだろうか。

アナキズムの原理から言えば、アナキストは現在を生きるべきであって、過去によって

アイデア出版案内

巴金(1904年～)は中国の作家・アナキストで現存の人だ。彼はエマを「精神的母」と呼び次ぎのように評価している。「彼女は私にアナキズムの美しさを見せて呉れた。私はそのエッセイを読んで眼の前が明るくなるのを覚えた。彼女の確信をもった議論、明晰な論理、深く透徹したウジヨン、豊かな知識、明瞭で情熱的な文体が、当時15才だった私を夢中にさせた。」—PA CHIN and His Writings, by Olga Lang ; Harvard University Press 1967—

巴金の本来はLi Fei-kan, 巴はバクーニンのバ、金はクロボトキンのキンである。

女性解放の悲劇

▶わが生涯を生きる◀より

カーネギー製鋼所のスト
ホームステッドの惨劇
金を作るのに街の女となる
サーシャ(A・ベルクマン)フリックを襲撃
売春宿に落着く
モストを鞭打つ—他—

▶エッセイ◀

アナキズム
少数者と多数者
女性解放の悲劇
結婚と愛
フランシスコフェラーと近代学校
女性参政権
愛国心

▶評言◀

ルイズミッシェルの印象
P・クロボトキンの印象
クロンシュタットの印象—他—

▶ロシアに於けるわたしの幻滅◀より

裏切られた革命

定価750円

印刷・出版

バルカン社

TEL 03-354-1039

規制されるべきではない。シュティルナーの言葉を借れば、昨日鳴いたがために、今日も鳴かねばならないのか、ということだ。過渡期を時間の流れで見ると「現在—過渡期—理想未来」となり、意識の流れから見れば「現在—理想未来—過渡期」ということになる。これを過渡期を中心として見るならば、過渡期とは、過去によって規定された未来によって規定された現在、ということになる。すなわち、過渡期とは、過去によって規定されたところの現在、ということなのだ。このことは、意識の流れから見る限り、過渡期はアナキズムにおいて否定されることを示す。それ故、アナキズムにおいて過渡期が成り立つためには、理想未来というものが、すなわち現在の言え、理念としての理想というものが、まったく現在によって規定されていないものとして存在しなければならないだろう。そして、歴史というものが個々の主体的行動を超えて、客観的な必然性によって決定されるとするならば、確に、そのような理想未来は、現在によって規制された理想とは言えないかも知れない（しかし、そこにおいても現在、未来の一時期でしかないその状態が何故理想とされるのか、という問題が含まれている。その意識は、現在によって規定されているといえないだろうか。それに第一、もし未来が決定されているとするならば、過渡期論を論じることにはどんな意味があるだろう）。現在アナキズムにおける過渡期論の必要性を説く人々は、アナキズムの理想を、このような個の主体的行動を超えた、すでに未来として決定されたもの、として考えているのだろうか。ここでは、理想未来をどう捉えるかが問題となっている。一つは、必然性によって決定されたものとして、一つは、あくまでも個の主体的な創出としての理想と、主体的行動によるその実現という二つの考え方だ。この対立はどうでもいいものとしてあるのではない。何故なら、アナキズムとはあくまでも個の主体性による思想であると同時に、個の主体性を否定するどのような考え方も拒否する思想だと思うからだ。しかし、アナキズムにおける理想未来を、個の主体的創出

とただけでは、アナキズムから過渡期論が完全に締め出されるということにはならない。もしアナキズムの理想を普遍的なものとし、なおかつそれを固定化するならば、昨日の理想は今日の理想であり、過渡期もはや過去によって規定されているとばかりは言えないからだ。アナキズムの理想とは普遍的な、絶対的なものとしてあるのだろうか。もしそうだとするならば、ブルードンとバクーニンとクロボトキンの理想の違いはどう捉えたいのだろうか。僕の考えでは、アナキズムの理想とは流動的なものだと思う。すなわちそれは普遍的な理想としてあるのではなく、あくまでも現在の僕が、現在を生きる中から、ということでは現在に規定されて創出したところの理想なのだ。もし、アナキズムの理想をこのように捉えるならば、アナキズムにおいては過渡期なるものは成立しない。過渡期が現在と異なる質の社会とするならば、過渡期における理想は現在とは異なるかもしれないのに、それを現在における理想によって規定するのは、あるいはそのような時期として捉えることは間違っている。過渡期が現在と同じ質の社会であるならば、その時期を過渡期というのは、現在を過渡期と言うのと同じぐらい欺瞞的であり、反動的であろう。どちらにしても、過渡期というようなものは、アナキズムとは相入れないし、アナキズムにおいて過渡期というものは成立しない。

ミニ・ニュース

群馬黒色戦線社の大島さんが、大杉の「労働運動」を1次から4次まで完全複製版として出された。定価は5000円

らじかる 第3号

発行日・1973年7月1日
編集人・西塔昌弘
発行人・はしもとよしはる
発行所・イデア出版
東京都新宿区東大久保1-464 松喜ビル
TEL 03-354-1039
年間購読料 300円(送共)